

〈わたし〉の言葉による自己表現

—新川和江「わたしを束ねないで」を読む—

古瀬 智美

Tomomi FURUSE

一、はじめに

私は普段、「わたし」という言葉を用いて自分のことを指している。しかし、この言葉は私個人だけのものではない。大橋（一九九五）は、「『わたし』という言葉の実体は「誰にでも使える代名詞」に過ぎず、「普遍的なありきたりな語」であると説明した上で、あらゆる人が使用可能な〈わたし〉という言葉で「独自のユニークな存在としての自分」を語ろうとする行為は、究極的には自分の存在が「言語の秩序に収奪され」てしまうことになる^{注1}と述べている。

大橋の考え方に触れたとき、私は二人の詩人の言葉を思い出した。

「わたしたちにとつて今いちばんゆたかでないものは、言葉です。言葉がゆたかではありません」——これは、詩人・長田弘によるエッセイからの一節である。言葉が「ゆたか」であるということは、単にその量が多いことを指すのではない。長田は、「どういふ自分であるかを語ることができる」ことこそが、その人がもつ言葉の「ゆた

かさ」であると捉えている。「自分のものでしかない価値」や「自分という独自性」を見つけられるかは、「どんな言葉をどのように使つて、自分で自分を自分にしてゆくことができるか」、「自分というものがその言葉によって、どのように表されてゆくか」ということに深く懸かっていると述べている。^{注2}

〈わたし〉という言葉は誰にでもひらかれた言葉である。どのような〈わたし〉であるのかという、その内実——〈わたし〉という存在を表現する言葉こそが、人と人とを違えるものであると言えるのではないか。

自分自身を、どのような言葉で表現するか。言葉に自分をゆたかに込めようとする、そうした言語表現の実践を示している作品として、新川和江の「わたしを束ねないで」という詩が思い出される。一九六六年一〇月『地球』第四二号にて発表され、一九六八年九月、地球社より刊行された第五詩集『比喻でなく』に収録された作品である。本作は、新川の代表作の一つとして名高い。国語科教科書に掲載されているほか、詩文集^{注3}や合唱曲^{注4}、各国語訳^{注5}といった様々な形で展開し、多くの人々に親しまれてきた。

本稿では、「わたしを束ねないで」に関する先行研究や国語科教科書の諸資料を参照しつつ、本作が示す言語表現の〈可能性〉について考察する。

二、表現上の特徴

(一) 比喩の多用

「わたしを束ねないで」は、五連で構成された口語自由詩である。

わたしを束ねないで

あらせいとうの花のように

白い葱のように

束ねないでください わたしは稲穂

秋 大地が胸を焦がす

見渡すかぎりの金色の稲穂

右に、本作の第一連を引用した。「わたしをくしないで」という拒否から始まり、「くのように」という直喩表現が続いた後、再度「くしないでください」と、自分を束縛するものを拒否している。それから、「わたしは○○(名詞)」と表現するに至る。これが本作の基本的な詩形であり、第二連以降も言葉を変えて繰り返し返される。

新川の詩は、非常に技巧的であると評されている。小海(一九八七)は、新川の詩について、「言葉そのものを非常に豊かに使おうという、そうした姿勢や工夫が詩全体のやわらかな感じになって出てきている」と評している。^{注6}また、足立(一九八七)は、「わたしを束ねないで」を「比喩だけでできている詩」と評している。加えて、比喩表現というものは、「わからない何かに近づこうとする行為」によって生まれるものであり、本作においては、「なぜそのような比喩を使ったの

か」という詮索はせず、何かに「近づこうとする姿勢そのものの面白さ」を味わうだけで良いと述べている。^{注7}

本作の表現上の特徴の一つとして、比喩の多用が指摘できる。第一連には、「あらせいとうの花のように」「白い葱のように」、第二連には、「標本箱の昆虫のように」「高原からきた絵葉書のように」、第三連には、「日常性に薄められた牛乳のように」「ぬるい酒のように」、第五連には、「・や・ いくつかの段落／そしておしまいに『さようなら』があつたりする手紙のように」とあり、作中で計七回の直喩表現が確認できる。小海の言う「言葉そのものを非常に豊かに使おうという、そうした姿勢や工夫」とは、このような比喩表現の多用を指しているのではないだろうか。それから、「わからない何かに近づこうとする行為」が比喩表現を生むのだという足立の指摘を踏まえるならば、本作からは、「わからない何か」——未だ定まらない自分を表現する言葉を模索し続ける「わたし」の姿を読み取ることができよう。

(二) 揺さぶりを与える第四連

本作は全体的に整然とした詩形であるが、第四連以降、微妙な変化が確認できる。第四連は次の通りである。

わたしを名付けないで

娘という名 妻という名

重々しい母という名でしつらえた座に

坐りきりにさせないでください わたしは風

りんごの木と

泉のありかを知っている風

ここで、第三連までの基本的な詩形は崩される。第四連では「わたしを名付けないで」と拒否した後に直喩表現は用いられず、具体的な「名」が挙げられている。その「名」は、体言止めによって強調されている。整った詩形であるからこそ、小さな揺らぎであっても作品全体に、そして読者にも響く。

第一連と第二連における直喩表現で用いられていた言葉は、「あらしいの花」や「白い葱」、「標本箱の昆虫」や「高原からきた絵葉書」といった、摘み取られた・切り取られた自然であった。第三連では、自然の状態が加工された・時間が経過して変化した「日常性に薄められた牛乳」や「ぬるい酒」といった言葉が用いられていた。そして第四連では、「娘」、「妻」、「母」という、自然物とはほど遠い、現実社会の課題をも含んだ言葉が挙げられ、読者は第三連までとのギャップに動揺させられる。この作品全体の中で第四連は、読者に緊張感を与える箇所となっている。続く第五連は以下の通りである。

わたしを区切らないで

・や・いくつかの段落

そしておしまいに「さようなら」があったりする手紙のように
こまめにけりをつけないでください わたしは終りのない文章

川と同じに

はてしなく流れていく 拡がっていく 一行の詩

第五連では第四連で生じた緊張感を、体言止め（＝第四連における表現）と直喩表現（＝第三連までに見られた表現）の両方を用いることで落ち着かせているようだ。この手法は、主和音から属和音に進行し、再び主和音に戻るといふ、西洋音楽の基本的な和音進行（カデンツ）に通ずるものがあり、音楽性に富んでいる。

三、教材としての扱われ方

菊地（二〇一七）の調査によると、「わたしを束ねないで」が初めて教科書に掲載されたのは、第一学習社『高等学校現代国語1』（一九七六年）においてである。これ以降、高等学校の教科書では、第一学習社『高等学校改訂現代国語』（一九七九年）、三省堂『高等学校現代文1』（一九九九年）、明治書院『現代文』（一九九九年）に掲載されていたが、二一世紀に入ってから姿を消した。小・中学校の教科書では、光村図書ただ一社のみが一九八四年から現在に至るまで、中学校三年生用の国語科教科書において掲載を続けている。^{注8}

現行国語科教科書である光村図書『国語3』（二〇二四年検定、二〇二五年度以降使用）において本作は、「8 未来へ向かって」という単元に位置付けられている。学習する時期の目安としては、中学校第三学年の三学期あるいは後期、一月と設定されていた。^{注9} 教材には、「詩の中の言葉や表現から作品のもつメッセージを捉え、自分の可能性について考えてみよう」というリード文^{注10}が付されて

いる。

また、光村図書のホームページにおいて公開されている「資質・能力系統表」には、各教材のカリキュラム・マネジメントへの視点（他教科・SDGs・ICTとの関連）が明記されている。「わたしを束ねないで」は、合唱曲^{注11}が作られているためか、音楽科との関連が図られている。SDGs（持続可能な開発目標）の観点では、達成すべき一七の目標のうち五つ目にあたる「ジェンダー平等を實現しよう」との関連が図られている。これは、本作の第四連の内容を踏まえてのことであろう。^{注12}

同じく公開されている「3年間指導計画例」では、学習活動の例として「詩に込めた作者の思いを想像し、現代に生きる自分たちの可能性について話し合う」ことが提案されている。その際には、「詩の歴史的背景を確認させるとよい」とされていた。^{注13}

現行国語科教科書である光村図書『国語3』の教材に関する諸資料を確認したところ、「わたしを束ねないで」は、自分の生き方や社会に関する自分の考えを深める教材として捉えられているようであった。本教材におけるリード文や提案されている学習活動には、「自分（たち）の可能性について」考える、とあった。義務教育課程の最終学年で、進路選択や卒業が迫っている生徒たちに、どのような規定からも解放されて、自由に自己を表現して生きていくというような、未来へのポジティブな「可能性」を本作から読み取らせることもできよう。しかし、ここでの「可能性」という言葉を、本作から読み取れるメッセージ性を、ポジティブな内容のみで捉えてし

まわないように留意したい。

四、本作が示す〈可能性〉

先行研究において本作は、「自分を規定するものを拒否する」というテーマをもつ詩として把握されている。自分を、自分の言葉で自由に表現することができるといような、希望に満ちた「可能性」。本作を通じて学習者に考えさせたい自分（たち）の〈可能性〉は、それだけではないだろう。

菊地（二〇一七）は、新川の詩作品である「名づけられた葉」と「わたしを束ねないで」に共通する「なづけ」というキーワードに着目し、二作を重ね読むことによって可能な読み方について考察している。「わたしを束ねないで」については、以下のように述べていた。

「わたしを束ねないで」における「なづけ」は本来は単なる「カテゴライズ」を指していた。それ以降の「という名でしつらえた座に／坐りきりにさせないでください」とあるように、「名付けないで」と言いながらも「なづけ」自体を拒むというよりもなづけた上で「坐りきりにさせ」ることに対し、憤りを感じているようだ。「カテゴライズ」自体に間違いはないが、娘や妻や母である以前に「わたし」はどのような人間なのかという点を軽視し皆一様にみなしてしまう「ラベリング」がこの詩の中では行われているのである。

（中略）

「わたしを束ねないで」ではほんとうの「わたし」を理解されず束ねてしまう現実と、自分の思うほんとうの自分とが比較されながら、他律から解放され自分らしく生きようとする姿が描かれているとされていた。これが表裏一体の意味をもつ「なづける」という行為（筆者注…先に、「なづける」という行為は、「命名」としての側面と「ラベリング」としての側面を併せ持っているということを指摘している）によつて、ほんとうの「わたし」を理解するのは「わたし」だけなのだろうかという疑問が立ち上がってくる。「なづけられる」ことを拒む「わたし」だが、「なづけてくる人の中には「わたし」を認める人もいるのではないだろうか。またそうした人々を拒む「わたし」こそ、実は誰かを「束ねている」のかもしれない。^{注14}

また、竹本（二〇一九）も菊地と同様に、言葉によつて表現される自己について触れながら本作について論じている。

自分を規定するものを拒否するというテーマを持ちながらもこの詩は、根底的なところで〈定義されること〉自体には逆らっていない。この詩は「束ねないで」と、定義への拒絶をまずは表明している。しかし拒絶のみでは終わらず、「わたしは稲穂」と、最終的に〈定義づけて〉いるのである。（中略）自己への定義を拒否するという主題に関しては、結局どのように逃れようとしても、言語において表現される以上、原理的に定義されな

いままの状態であることは不可能であるとの事実を、この詩は示す結果となっている。

（中略）

この詩のポイントは、後半の肯定的イメージの主張にあるのではなく、否定と肯定の交錯によつて定義が更新される、その運動性それ自体を捉えているところにあると見なければならぬ。（中略）

言語が事物を分節化するその機能自体からは逃れられないとすれば、異議申し立ては単なる拒絶ではなく、無限に定義づけを更新し、ずらし続ける行為においてなされるべきという表現上の実践がこの詩にはある。（中略）ここで申し立てられている異議は、定義づけに対してではなく、一つの定義のみに固定しそれ以外の可能性を認めないことに対してなのである。^{注15}

近年の研究においては、「娘」「妻」「母」といった「カテゴライズ」自体に間違いはなく、「定義されること」自体には逆らっていないということが着目され、「わたし」が定義づけに対してではなく、「ラベリング」によつて「わたし」という個人が個人として見られていないことや、個人のあらゆる可能性が認められていないことに対して異議を申し立てているのだという読み方が示されている。

本作において「わたし」は、自己は言葉で定義され続けるのだという、言語の秩序に逆うことへの〈不可能性〉を認めている。その上で「わたし」は、自分を様々な言葉で定義し続ける。本作が描い

ているのは、言葉で豊かに自己を表現しようとし続ける「わたし」の行為・姿勢そのものである。そして、単一的な言葉で自己を、ひいては他者を安易に捉えてしまうことへの危険性である。言葉と向き合い続けなければ、知らず知らずのうちに、本意な言葉によって誰かに「束ね」られる、あるいは「束ね」てしまう〈可能性〉があるということを示している。

ただし、誰もが言葉によって「束ね」られることに抵抗感をもっているとは限らない。西沢(二〇〇三)は、「いつの時代にも少年少女は、くくられる安心と、くくられないがための不安定な行動との二律背反で悩む」と述べ、本作は現代の少年少女にシンクロしやすい詩であると評していた。^{注6}言葉によって定義されるという行為に対する感じ方は、人によって、またその人が抱える状況によって様々であろう。

五、おわりに

自分が何者であるか。それを表現するための言葉は多様である。時代と共に、ある言葉の意味やイメージが変化したり、新たな言葉が生まれたりすることがある。詩人の谷川俊太郎は、近年の言葉の状況について、インターネットの普及により「言葉の絶対量が急激に増大」し、ほとんどの言葉が蓄積され活用される「ストック」ではなく、流れ去り消えてゆく「フロー」と化してしまっていると指摘している。そして、それは「全世界的な言語状況」であると捉えている。^{注7}そうした状況の中で、〈わたし〉たちは〈わたし〉を〈わ

たし〉にしてゆくために、自分を表現するための言葉を模索していかなければならぬ。

自分に当てはまる言葉を発見した時に安心することもあれば、ある言葉に自分を押し込められることによって違和を感じることもある。自分が使いたい言葉／使いたくない言葉、使われない言葉／使われない言葉について、自覚的な理解が必要になってくるのではないだろうか。それから、自分が言葉に対して違和を感じた時、言葉を見つめ、その意味を再構築していくことや、相手が使う言葉を思い遣ることも。

「わたしを束ねないで」は、言葉で表現する／されるとは——言葉を使って生きていくとはどういうことであるか——学習者に考えさせる契機を与えられる作品であるだろう。

- 注
- 1 大橋洋一『新文学入門』岩波書店、一九九五年八月
 - 2 長田弘『読書からはじまる』筑摩書房、二〇二一年五月
 - 3 画・伊藤桂司、詩・新川和江『詩画集 わたしを束ねないで』ザイロ、一九九六年九月
 - 4 作曲・木下牧子、作詞・新川和江『わたしは風』女声合唱曲集』カワイ出版、一九七三年二月

- 5 高山実佐「『わたしを束ねないで』、そして『耳をすませば』——かけがえない一人の人間として生きる——」（早稲田大学教育総合研究所『ジェンダー・フリー教材の試み——国語科にできること』学文社、二〇〇一年三月）によると、英訳・アラビア語訳・ハンガール語訳・モンゴル語訳がなされているとのことであった。
- 6 小海英二・高橋宗近・森山晴美・須貝千里「座談会女流詩人を読む」（月刊国語教育）第七卷第三号、一九八七年五月
- 7 足立悦男「遠近法の感覚—新川和江論」（月刊国語教育）第七卷第三号、一九八七年五月
- 8 菊地寧々「ダイバーシティにおけるうた——新川和江『名づけられた葉』『わたしを束ねないで』論——」（近代文学 研究と資料 第二次 第一集、二〇一七年三月）
- 9 光村図書「令和7年度版 光村図書 中学校『国語』内容解説資料 教材配列一覧表」07ck_haretsu.pdf（最終閲覧日：二〇二五年六月二日）
- 10 光村図書『国語3』二〇二四年検定、二〇二五年度以降使用
なお、この一文が学習目標や手引きではなく「リード文」であることは、「年間指導計画例」における記述で確認した。
- 11 光村図書「3年間指導計画例」07ck_nenkei3-02.pdf（最終閲覧日：二〇二五年六月二日）
同注4参照。
- 12 光村図書「令和7年度版 光村図書 中学校『国語』内容解説資料 資質・能力系統表カリキュラム・マネジメントへの視点（他教科・SDGsとの関連）」07ck_sn_keiou.pdf（最終閲覧日：二〇二五年六月二日）
- 13 光村図書「3年間指導計画例」07ck_nenkei3-02.pdf（最終閲覧日：二〇二五年六月二日）
同注8参照。
- 14 竹本寛秋「新川和江の表現機構—中学校国語科教材を手がかりとして—」（『詩と思想』第三卷三八一号、二〇一九年三月）
- 15 西沢杏子「少年詩」のなかの少女」（『日本児童文学』第四九卷第四号、二〇〇三年七月）
- 16 谷川俊太郎・和合亮一「にほんごの話」青土社、二〇一〇年三月
- 17 *「わたしを束ねないで」本文は、新川和江『わたしを束ねないで』（童話屋、一九九七年九月）より引用した。
- *本稿の引用文における傍線は、全て筆者が私に付したものである。